

# ちよつと遊びに……

多田道太郎

「遊びに……」というおもしろい表現がある。「いちどぜひ遊びにいらっしやい」などと言う。「遊びに」なんていうものだから、どんなおもしろいことをして遊ぶのかと思ったら、お茶でも飲んでせいぜいが無駄ばなしをする程度である。これが「遊びに行く」ことの実体である。

いつかあるフランス人に「いちど遊びにいらっしやい」と言おうと思つて、ふといいよとんでしまった。私は日本語で「遊びにいらっしやい」という発想をしていたのだが、これに対応するフランス語はないのである。カイヨワ氏は新版『遊びと人間』の序論のなかで、遊びという言葉がメタフォルとして使われるそ

の例をいろいろあげているが、もちろんそこには「遊びに行く」という言い方はない。(前にもふれたがフランス語では avoir beau jeu 絶好のチャンスとか montrer son jeu 手の内を見せるとか、ともかく賭けに関する表現が目だつ。つまり、jeu 遊びというときまづ彼らは賭けのことを思いおこすようである。)

各国の言葉の中の遊びの表わしかた、その研究に先鞭をつけたのはホイジンガだ。彼は日本語では「……遊ばす」という敬語表現に着目した。「こちらへおはいり遊ばせ」などという。これはホイジンガによると、高貴な人にとっては何をしても遊びなのだ、という觀念に由来しているという。「身分の高い人はた

だ自発的な楽しみによつてのみ行動するほどの崇高さの窮みに生きていると思われるのだ。」(「ホモ・ルーデンス」里見元一郎訳)

そしてこういう表現の底には、「いっさいが遊びにすぎないという仮構」があつて、この仮構と「日本の生活理想のたぐいまれな真面目さ」とは表裏一体になつているといふ。これはおもしろい考えだ。

遊ばす、という言葉はもともと、狩猟、歌舞、音楽、遊樂などをなさるといふ意味であつたし、ここから尊敬の補助動詞がでてきたと考えるのは、かならずしも荒唐無稽のこじつけではない。しかしホイジンガの考えでとりわけおもしろいのは、「いっさいが遊びにすぎないという仮構」を指摘している点である。

「たぐいまれな真面目さ」は民俗学の言葉でいえばケの次元である。この次元をとびこえると、すべてが遊びにすぎなくなる。上代の高貴な人は身をやつし、忍ぶ姿となる。すると、ドストエフスキー流にいえば「すべてがゆるされる」のだ。現実世界とは別の次元の「仮構」の中にはいれる。だからこそ、たとえば茶室にはにじり口という妙な入口があつて、人びとは妙

な格好でそこから入りこむ。この「儀式」は上代の「忍ぶ恋」、つまり身をやつすということにまつわる感動の再現なのである。

というわけで、ダンテの「この門」ならぬこの入口から入る人は、じつは「いっさいが遊びにすぎない」という仮構」の中に入るのである。

ところで、さきの「遊びに……」というのも、この伝で解釈できるものかどうか。

遊びに来た人は、現実生活とさほど違ったふるまいをするわけではない。お茶のみ、しゃべる。その程度で、とりたてて変つたことはない。しかし、それでいて、気分がちがう。これはやはり遊びなのであり、ここでは「いっさいが遊びにすぎないという仮構」がはたらいている。——こう言えるかどうか。

お茶の「にじり口」などについては、断然自信をもつてこれは仮構であるといえるのだが、遊びに行つたり来たりの日常については、さて、そんなことがいえるかどうか、心もとない。では、ほかにどういう意味に「遊びに……」が解釈できるか。

「遊びに……」に近い意味は、たとえば次のような語